

## ● 第4回 高松国際ピアノ コンクール

亀山 愛

4回目を迎えた高松国際ピアノコンクールが2018年3月14日から25日まで、高松市のサンポートホール高松で行われた。頂点に輝いたのは、神奈川県出身の古海行子（20）＝昭和音楽大2年＝。同コンクールでは、日本人で初めての優勝となった。海外からの応募者が増加する中、3次審査に進んだ10人のうち国内勢が半数を占め、本選にも古海を含め2人が進出するなど日本勢の活躍が目立つ大会となった。

2006年に始まった同コンクールは、2015年に国際音楽コンクール世界連盟への加盟を果たした。世界連盟に仲間入りできた効果は大きく、今回の応募者数は前回（2014年）より93人増え、過去最高の332人に達した。インターネットでも応募できるようになったことも後押しし、外国人の応募者数は前回よりも85人増えて180人と、全体の半数以上を占め、日本人と外国人の割合は逆転した。

審査もより充実した内容となった。今回、初めて3次審査でピアノ四重奏を課題曲に取り入れ、出場者は国内外で活躍する一流の演奏家たちと共演した。弦楽器の3人と息を合わせつつも、コンクールでは自身の個性も表現しなくてはいけないとあって、難しさを痛感した出場者もいたようだ。

3次審査では千葉県出身の小出稚子が作曲した、高松市の屋島地区に伝わるタヌキの伝説「屋島の太三郎狸」と讃岐名物のうどん打ちを題材にした楽曲「うんぼこどんぼこ」も課題曲となった。タヌキの腹鼓のようでもあり、うどんを打っている様子にも感じられるリズムが楽しい一曲で、出場者それぞれの解釈を味わった音楽ファンも多かったことだろう。

本選には5人が進出。頂点に立った古海は、5人のうち最年少ながら、情熱的かつダイナミックな演奏で観客を引きつけた。岩崎淑審査員長は「楽譜を見て演奏してもいい曲を暗譜で演奏しており、驚いた。曲の解釈もレベルが高い」と評価し、「明日からいろいろなステージに立っても大丈夫」と太鼓判を押した。

2位は韓国のキム・カンテ（21）、3位は北海道出身の伏木唯（27）、4位はロシアのゲルマン・キトキン（23）、5位はルーマニアのアウエリア・ヴィソヴァン（27）となった。なお、これまでの優勝者は1回目がウクライナ、2回目がロシア、3回目が韓国といずれも海外勢が占めていた。

古海は2018年9月、高松に凱旋し、本選で共演した瀬戸フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会にゲスト出演。ラフマニノフの「バガニエーニの主題による狂詩曲」を披露し、高い技術力に裏打ちされた情感豊かなメロディーで観客を魅了した。優勝後、古海は国内やイタリア、ルーマニアなどヨーロッパでの副賞演奏会に挑んだほか、日本コロムビアの新レーベルからCDデビューも果たした。

なお、前回覇者のモン・ジヨン（韓国）は優勝後、2014年にジュネーブ国際音楽コンクールのピアノ部門、翌2015年にはブ

ゾーニ国際音楽コンクールで優勝するなど目覚ましい活躍を遂げた。彼女の活躍によって、コンクールの知名度や地位がアップしたところは大きいだろう。今回優勝した古海をはじめ、激戦を闘ってきたコンテストたちが国際的に活躍する姿に期待したい。

最後に、地元香川県勢は、予備審査を通過し1次審査に進んだのが高松市出身で東京藝大大学院の鐵百合奈（25）のみだった。自身としては初めて3次審査まで進出し、審議員特別賞も受賞した。鐵は大学院で演奏解釈方法を研究しており、2017、18年と2年連続で柴田南雄音楽評論賞の本賞を受賞する快挙を達成した。2019年2月からは4年にわたってベートーヴェンのピアノソナタ全曲演奏会に挑み、新たなステージに進んでいる。地元の期待を一手に受けた鐵だったが、コンクール終了後「お客さんの温かさを感じ、頑張ろうと思えた」とも語ってくれた。地方で開催するコンクールだからこそ、県ゆかりのピアニストの活躍に今後も期待したい。

本選のオケを担当した瀬戸フィルハーモニー交響楽団にとっても、コンクールは刺激になったに違いない。瀬戸フィルは2016年、日本オーケストラ連盟に四国のオーケストラでは初めて加盟し、ミニコンサートや定期演奏会などを精力的に実施している。高松でのコンクール実施が地元音楽界に与える影響は大きい。

また、コンクール期間中、会場のサンポート高松周辺では、出場者に握手やサインを求める音楽ファンらの姿も見受けられた。「次世代のスターが見つかる場」として高松国際ピアノコンクールが全国の音楽ファンらに親しまれ、高松に人を呼び込むことができればなによりだ。

（年齢、所属は当時）